

金剛・葛城山麓 葛城氏の鍛冶工房「忍海」

古代 「忍海」には数々の渡来人が住み鉄鍛冶の技術を伝えた

1. 葛城氏の王城跡 御所市 極楽寺ヒビキ遺跡 見学 2005.2.26.
2. 渡来鉄技術集団の郷 忍海 Walk 2005.3.9.
3. 「忍海と古代鉄」 新庄町歴史博物館展示より



飛鳥 甘樫丘から眺めた金剛・葛城山 2005.3.9.

【4世紀末から5世紀前半の頃 葛城の豪族 葛城襲津彦が朝鮮半島 新羅へ遠征した際の記事】

- 「のち新羅に詣りて、蹈鞬津に次りて 草羅城を抜きて 還る。
この時の俘人等は、今の桑原、佐糜、高宮、忍海、凡て 四の邑の漢人等が始祖なり。」
- 「日本書紀」神功皇后摂政五年三月条

葛城の豪族 葛城襲津彦が朝鮮半島 新羅の蹈鞬津の港から上陸し、草羅城を攻め落として帰ってきた。

その時連れ帰った人達が現在桑原、佐糜、高宮、忍海の四箇所に住む人達の祖先である。

- 「日本書紀」神功皇后摂政五年三月条



この記事にある「忍海」は大和平野 金剛・葛城山の山麓にあり、記事にある葛城氏の根拠地の一部 現在の葛城市（新庄町）であった。そして この「忍海」にある脇田遺跡からは 古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけて鉄器を生産していたことを裏付ける資料が出土している。また、忍海の後背の葛城山山麓の尾根筋には 5 世紀末から 7 世紀にかけて横穴式石室を持つ群集墓が作られ、鉄滓や鍛冶工具が副葬されている。（寺口忍海古墳群）

上記日本書紀の記事にある鉄の先進国新羅 また、「蹈鞬津」の港「蹈鞬」といい、横穴石室を持つ群集墓 いずれも この時代に朝鮮半島から持ち込まれたものであり、鉄と関係する渡来人が この「忍海」に古くから住み着き 鉄の生産に携わっていたこと、そして、それを統括していたのがこの地を本拠地として勢力を

伸ばしていた葛城氏であることがうかがい知れる。(日本書紀の記述そのものを鵜呑みには出来ないが・・・)
 葛城氏は大和王権が成立したあと、天皇の皇后を次々輩出し、大王家の外戚として大いに権勢を誇ったが、
 5世紀半ば 雄略天皇の逆鱗に触れ、焼討ちに会うなどして急速に勢力が衰える。この事件を契機に忍海は
 王権の直轄地になるが、この地での鉄器生産地としての重要性は奈良時代まで続いてゆく。

数年前 歴史民族博物館のシンポ「伽耶の鉄と倭国」の「韓
 鍛冶と渡来技術」花田勝広氏の講演で倭王権が確立されて行
 く中で、倭王権を支えた専用鍛冶工房として、布留・大県そ
 して忍海の存在を知りました。

葛城・金剛山麓の「忍海」。

場所は判ったのですが、どんなところなのか

昨年 大県へ行って 次は「忍海」と調べはじめた 2月22
 日朝日新聞の朝刊に「葛城氏の王城 出土」(御所市極楽寺ヒ
 ビキ遺跡)の見出し。

2月26日に現地説明会があると・・・そして その集合場所
 に近鉄「忍海」駅。

葛城氏・忍海の先進鍛冶を見聞きする絶好のチャンスと久し
 ぶりに現地説明会に出かけ、忍海にある新庄町歴史博物館で
 「忍海」の歴史や和鉄についての資料を入手。再度 3月9
 日 葛城山麓の丘陵地 古代 鉄の渡来技術集団の郷「忍海」
 を Walk してきました。

「忍海」は葛城山の中腹からなだらかに大和平野に裾野を広
 げる丘陵地。眼下に広大な大和平野がみ渡せ、そんな山の尾根筋の静かな林の中に 幾つもの小さな円墳が
 並び立ち、
 ここが鉄の技術集団の根拠地であったことを示していました。

この群集墓(寺口忍海古墳群)の光景は九州菊池川流域 山鹿でみた群集墓の古墳群そっくりでしたが、残
 念ながら装飾古墳の痕跡はありませんでした。



極楽寺ヒビキ遺跡 2005.2.26.



寺口忍海古墳群 2005.3.9.

金剛・葛城山麓 葛城氏の鍛冶工房「忍海」

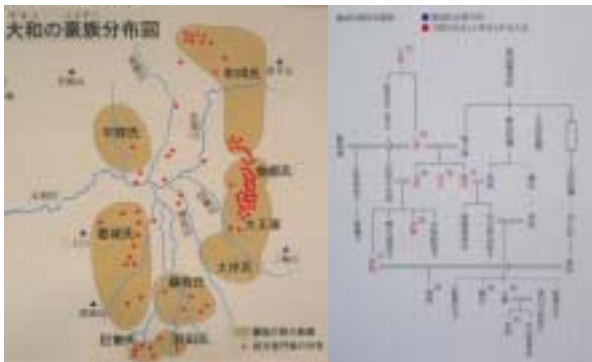
古代 「忍海」には数々の渡来人が住み鉄鍛冶の技術を伝えた

【 内 容 】

1. 葛城氏の王城跡 御所市 極楽寺ヒビキ遺跡 見学 2005.2.26.
2. 渡来鉄技術集団の郷 忍海 Walk 2005.3.9.
3. 「忍海と古代鉄」 新庄町歴史博物館展示より

1. 葛城氏の王城跡 御所市 極楽寺ヒビキ遺跡 見学 2005.2.26.

御所市極楽寺ヒビキ遺跡
葛城氏の王宮跡



倭王家と葛城氏の関係 5世紀

鉄素材の自給前夜は倭王権が支配力を高めて行く時代
そんな5世紀 倭王権の外戚として勢力を伸ばした大豪族
葛城氏。

その根拠地金剛・葛城の山麓には多くの渡来人技術集団が
いて、葛城氏の支配下で生産工房が営まれていた。そのも
っとも重要なのは「忍海」の韓鍛冶・鍛冶集団で日本書紀
にもその記録がある。

力の象徴「和鉄」。 倭の大豪族葛城氏の鍛冶工房「忍海」
でも数々の鉄製品が作られると共に鉄素材自給の試みが重

ねられていただろう。そんな権勢を誇った葛城氏も
雄略天皇の焼討ちにあって5世紀末には衰退して行
く一方、「忍海」は大和王権の直轄地となり、その鍛
冶工房は益々隆盛をきわめてゆく

そんな 初期大和王権の片腕として権勢を誇り、
古代の鉄器生産に大きく関わった葛城氏の中心地で
「葛城氏の王宮跡」が発掘。しかも記紀に記載され
たごとく「焼討ちの痕跡を残している」という。

大和王権がおさめる大和平野の中心部の南部一体を
支配する葛城氏。

金剛・葛城連山の麓 北には竹之内街道から河内・難波



葛城氏王宮跡 極楽寺ヒビキ遺跡周辺図

へ。南へは 吉野・高野の山間から峠を越えて紀ノ川沿いに紀の国にでるいわば倭の玄関口に位置する葛城氏の本拠地。金剛山と葛城山の鞍部水越峠の下に位置する山麓丘陵地の高台で、眼下に大和平野を見渡せる場所で、ちょうど大和平野を挟んで飛鳥と反対の金剛・葛城の山の麓である。

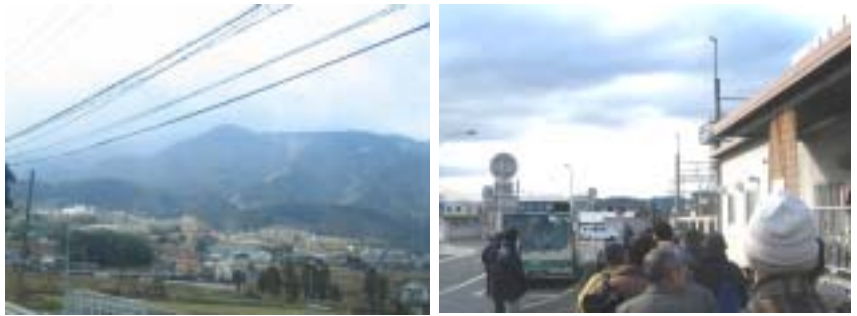
2月26日(土) 極楽寺ヒビキ遺跡現地説明会参加のため、早朝神戸をとびだす。阿部野橋から近鉄で集合場所の近鉄御所線「忍海」駅へ向かう。

近鉄阿倍野橋駅ではしきりに駅のマイクが「極楽寺キビ遺跡」への行き方を伝え、「忍海」駅には現地へ行く臨時バスの長い行列が出来ている。聞きしにまさる「古代史ブーム」飛鳥・万葉集

とはちょっと違う古代のロマンに惹きつけられた人の多さにビックリである。忍海周辺を歩いている間もなし。バスに乗り込む。葛城山にはうっすら雪が残っていて、風がまだ冷たい。

忍海駅から葛城の山裾に沿って丘陵地の高台を南に葛城山ロープウェイを越すと金剛山の本体が見えてくるところで、バスが一台とおれる程度の道に入って 丘陵地を登って行く。

左に大和平野右に葛城・金剛の山を眺めながら 約20分 いくつかの集落を抜けると極楽寺の集落につく。もう 大勢の人が歩いている。完全に行楽地の感覚である。



近鉄忍海駅とその背後の葛城山 2005.2.26.



極楽寺集落で 遺跡へ向かう人並と集落から見下ろす大和飛鳥 2005.2.26.

でも 集落にはいると遺跡に向かう人並みを別にすれば、もう車の通らないのどかな里の風景が広がっている。この同じ丘陵地で発見された古代渡来人と関係が深い二光寺廃寺の現地説明会も同時に行われている。丘陵地に広がる極楽寺の集落を東に少し下って家並みが切れたところに飛鳥時代に創建された二光寺廃寺遺跡が発掘。この横から北の丘陵地の竹藪に向かって 約200mほどいったところに遺跡があり、そこへの見学通路に人並みが続いている。



ヒビキ極楽寺ヒビキ遺跡の森 背後 葛城山 2005.2.26.

この見学路の入り口でヒビキ遺跡と二光寺廃寺遺跡現地説明会の資料をもらって見学通路を進む。



二光寺廃寺遺跡



ヒビキ遺跡手前の竹藪

極楽寺ヒビキ遺跡

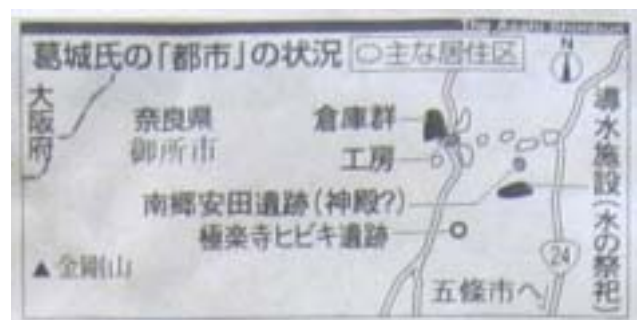
竹藪の中につけられた見学路を抜けると突然視界が開け、林に囲まれた台地に多くの人々が群れている。前方下の方に遠く大和平野が見える。ここが、極楽寺ヒビキ遺跡。

遺跡の南西側の高台広場から遺跡全体が見渡せ、約30X50Mほどの高台が発掘され、平地に掘立て柱跡が白くマーキングされて並んでいるのが見える。その背後北東側は谷になっていて眼下に大和平野 北から西には葛城山・金剛山の山並みが続いている。



葛城氏の王宮跡とみられる極楽寺ヒビキ遺跡 南西端の高台より（左：西 正面：北 右：東）2005.2.26.

この地は標高 240m の高台で 周囲を石を張った堀に囲まれ、その中 西側にはこの遺跡の主要建物である正方形の四面庇付の掘立柱建物があり、二階建てで南面・西面に縁側があったと考えられている。その東側は広場でそこに堀の跡や物見台跡が見つかっている。また 堀の一部は石を据えた庭状になっている。また、すべての柱跡周辺には焼けた土や灰が見られ、記紀に記事のある雄略天皇による焼討ちを裏付けるものとして注目されている。



土器などの出土は少なく生活臭がなく、葛城氏の「祭祀」または「行政」をつかさどる施設跡で周囲から見上げる高台にあることから、葛城氏の王宮の中核施設であると見られている。

また、この遺跡の周辺からはさまざまな機能を持つ施設が発掘されており、この地が葛城氏の根拠地であり、このヒビキ遺跡がその中核の施設と見られている。



南東端より 全体を見る 背後に金剛山 葛城山が見える 2005.2.26.

いわれてみると「そうか」と思うのですが、発掘された遺跡の土には所々赤茶けた土が混じり、柱跡にもそれが見える。



柱跡周辺の地面に残る赤茶けた土 これが雄略天皇による焼討ちの痕跡かもしれない

雄略天皇による葛城氏邸宅焼討ちの記事 概説

5 世紀の半ば 皇位継承をめぐる争いの中、安康天皇は自分が殺した大草香皇子の子眉輪王により、即位まもなく暗殺される。安康天皇の弟である雄略天皇が葛城氏の酋長円大臣の館に逃げ込んだ眉輪王を攻める。

葛城氏の酋長円大臣は娘韓姫と葛城領を献上して許しを請うが、攻め滅ぼし、韓姫を妻に娶り、所領を直轄地とする。この眉輪王の乱を契機に葛城氏は衰退する

5 世紀はじめには 北九州で磐井の乱が起こり、倭王権に対抗する九州勢力が一掃される。

そして 倭の豪族葛城氏も……。大豪族の連合体として出発した倭王権が国内にあっては着々と中央集権化を進めてゆく。一方 大陸との関係でいうと 朝鮮半島は伽耶・百濟・新羅・高句麗の分立する三国時代 戦乱の中 倭にとっては鉄素材の供給地として密接な交流がつつき、多くの渡来人が文物を伝える。

この朝鮮半島の交流・鉄の覇権も次第に大和王権が握ってゆく。



現地説明会で貼り出された極楽寺ヒキ遺跡 大型掘立柱建物復元図

そんな時代の中、葛城氏の持つ鉄の工房「忍海」もこの眉輪王の乱を契機に大和王権に組み込まれて行く。古代葛城・金剛山麓の道は技術を持ってきた渡来人たちの「和鉄の道」遠く見下ろせる大和・飛鳥を眺め、金剛・葛城の山合いを見ているもっと深い数々の歴史が詰まっているに違いないと思えてくる。



二光寺廃寺遺跡



二光寺廃寺遺跡 飛鳥時代の寺院 金堂基壇が出土

今年の2月に、極楽寺ヒビキ遺跡から200mほど南の金剛山東麓御所市西北窪の水田の下から寺院の金堂と考えられる建物跡が発見され今まで知られていなかった古代飛鳥時代の寺院の存在（7世紀後半）が明らかになりました。周辺からは多量の瓦とともに200点を超えるせん仏が出土し、豪華なせん仏壁を構成していたことが想像される。（せん仏は小型の仏像の型を粘土に押し付け焼いたもので、金箔（きんぱく）が張られ、金堂内部の壁を飾っていたとみられる。）

また出土した軒瓦からは周辺の高宮廃寺や朝妻廃寺といった渡来人と関係深い寺院との関わりも考えられている。

この遺跡の付近には、渡来系氏族の墓と考えられる北窪古墳群(6世紀後半 鉄鍛冶の技術集団と関連する群

集墓 鉄滓出土)があり、この周辺に住んだ渡来鍛冶集団の一族の寺ともみられる。



二光寺廃寺遺跡から出土した「せん仏」



もとの極楽寺の集落に戻って、また バスで「忍海」駅に戻りました。
満員のバスの中も「葛城氏の王宮跡を見た。しかも 焼討ちの痕跡もみられた」といささか興奮気味。
忍海駅のすぐ前に葛城市の新庄町歴史博物館があり、忍海の歴史の常設展示と共に二光寺廃寺から出土した「せん仏」が展示されていたのを見学。知らなかった忍海の古代・忍海の鉄など多くの資料が得られました。
午後 予定があったため、古代「忍海」の鉄鍛冶関係の資料を貰って 再度忍海を訪ねることにして、近鉄に飛び乗って帰ってきました。 時折雪がちらつく 寒い一日でしたが、満足の日。



新庄町歴史博物館 忍海の歴史 常設展示より 2005.2.26.

極楽寺ヒビキ遺跡周辺を中心に北の忍海へ いわゆる金剛・葛城の山麓「葛城」の地域には数多くの古代渡来入関連遺跡が点在しており、渡来人と葛城氏の関係が深いことがうかがえる。

その渡来人と葛城氏の関係を示す key ward は「鉄・鍛冶」であり、そんな鉄・鍛冶渡来の流れが、古墳時代から葛城氏衰退後の飛鳥時代へと脈々と続いて行く。



【4世紀末から5世紀前半の頃 葛城の豪族 葛城襲津彦が朝鮮半島 新羅へ遠征した際の記事】

「のち新羅に詣りて、蹈鞬津に次りて 草羅城を抜きて 還る。
この時の俘人等は、今の桑原、佐糜、高宮、忍海、凡て 四の邑の漢人等が始祖なり。」

- 「日本書紀」神功皇后摂政五年三月条



古代 朝鮮半島から倭へと続く文物・人の交流路が脈々と続きいてきた。その道の主は「和鉄の道」。そんな道がこの葛城・金剛の山裾を通っており、それを支配していた葛城氏。雄略天皇によって焼討ちを受け、衰退していったが、鉄の自立前夜 和鉄の展開に果たした役割は大きいだろう。記紀の中に書かれた葛城氏の記事と王城の跡にそびえる金剛・葛城の山を眺めながらそんなことを感じていました。

2005.2.26. 葛城氏の王宮跡で
Mutsu Nazkanishi

金剛・葛城山麓 葛城氏の鍛冶工房「忍海」

古代 「忍海」には数々の渡来人が住み鉄鍛冶の技術を伝えた

2. 「忍海と古代鉄」

新庄町歴史博物館展示より



葛城山の山麓に広がる忍海



忍海 古墳時代の遺跡 脇田遺跡



脇田遺跡から出土した鉄滓と羽口



古墳時代畿内の生産工房遺跡 (花田氏資料より)

忍海群脇田鍛冶工房

私が金剛・葛城の山麓の地に「忍海」の名を見つけたのは数年前 歴史民族博物館のシンポ「伽耶の鉄と倭国」の「韓鍛冶と渡来技術」花田勝広氏の講演で古墳時代倭王権が確立されて行く中で、倭王権を支えた専用鍛冶工房として、大県・布留そして忍海の存在を知りました。

大県鍛冶工房が倭王権直轄であったのに対し、布留は物部氏 忍海は葛城氏の根拠地。それらの豪族が支配していたと考えられ、鍛冶技術集団である渡来人が数多くいたと考えられている。

また、5世紀末には葛城氏は衰退し、忍海は大和王権の直轄地となるが、忍海の鍛冶集団は忍海氏として引き続き倭王権の鍛冶工房として6,7世紀まで隆盛を極める。訪れた葛城市新庄町歴史博物館にはこれら「忍海」の古代 渡来人のかかり・葛城氏の盛衰など「忍海」の歴史がパネル展示されていた。



古墳前期・中期の鍛冶工房分布
3世紀後半から5世紀後半



古墳後期の鍛冶工房
6・7世紀

畿内古墳時代の鍛冶工房遺跡 (花田氏資料より)

はるか東に大和三山を望む金剛・葛城の山麓沿い「忍海」周辺の丘陵地には古墳時代の多くの群集墳が点在する。それらの群集墳からは、武器や馬具、農具、治工具など特色ある遺物が出土しており、技能集団としてこの地の豪族「葛城氏」「倭王権」を支えていたと考えられる。そして この技術集団は群集墓や出土品の特徴から渡来人と関係していると考えられている。



それらの中で 「忍海」の後背葛城山の尾根筋にある寺口忍海古墳群・笛吹古墳群・山口千塚古墳群や金剛山北麓の南郷遺跡群などからは多くの鉄製品やむ鉄滓が出土し、鉄鍛冶集団の群集墓と見られている。これらの群集墓と関連する集落遺跡の一つに忍海の「脇田遺跡」があり、此処からは古墳時代から奈良時代にかけて、数々の鉄製品・鞆羽口や鉄滓などが出土し、葛城氏の中心的鍛冶工房であったことを示している。また 葛城氏の王宮跡が出土した葛城の地の南郷遺跡群 南郷角田遺跡では鉄・ガラス・銅・銀などの複合工房であったと見られて、周辺北窪遺跡からは若干ながら鉄滓も出土しているという。



脇田遺跡出土の羽口・鉄滓



寺口忍海古墳群（群集墓）パネルと出土品（右上:刀剣など 右下:鉄滓） 葛城市歴史博物館展示より



葛城山麓の群集墓 5世紀半ばから7世紀半ばにかけ、葛城山の尾根筋など丘陵地に主に数多くの小さな円墳が密集して作られる 主に木棺直葬・横穴石室

また、日本書紀には

【4世紀末から5世紀前半の頃 葛城の豪族 葛城襲津彦が朝鮮半島 新羅へ遠征した際の記事】

「のち新羅に詣りて、蹈鞬津に次りて 草羅城を抜きて 還る。
この時の俘人等は、今の桑原、佐糜、高宮、忍海、凡て 四の邑の漢人等が始祖なり。」

- 「日本書紀」神功皇后摂政五年三月条

上記日本書紀の記事にある鉄の先進国新羅 また、「蹈鞬津」の港「蹈鞬」といい、横穴石室を持つ群集墓 いずれも この時代に朝鮮半島から持ち込まれたものであり、鉄と関係する渡来人が この「忍海」に古くから住み着き 鉄の生産に携わっていたこと、そして、それを統括していたのがこの地を本拠地として勢力を伸ばしていた葛城氏であることがうかがい知れる。

葛城氏は大和王権が成立したあと、天皇の皇后を次々輩出し、大王家の外戚として大いに権勢を誇ったが、5世紀半ば 雄略天皇の逆鱗に触れ、焼討ちに会うなどして急速に勢力が衰える。この事件を契機に忍海は王権の直轄地になるが、この地での鉄器生産地としての重要性は奈良時代まで続く。

この「忍海」に住んでいた集団を「忍海漢人」「忍海部」と呼び、統合して「忍海氏」と呼んでいる。その出自については上記渡来人記述ほか良くわかっていないが、この集団はその後 鍛冶に携わる技術者として日本各地にちらばり、その足跡を残している。

続日本紀養老3年の条「金作・韓鍛冶」の人々の中に伊勢国・播磨国・近江国などに「忍海」の名を関する人物がいるという。また、筑紫や対馬で兵器等を作らせたとの記事も古事記や続日本書紀にみられる。

また、壬申の乱の折りに忍海氏が天武天皇側の武器調達で功績をあげたともいう。

新庄町歴史民俗資料館編「忍海探訪」より

また、私の住む神戸の北西部押部谷・三木市志染の丘陵地にこの忍海部の足跡があり、中央の倭政権

と密接につながっていたこと初めて知りました。

『日本書紀』に雄略天皇に父を殺された億計・弘計二王子（後の仁賢・顕宗天皇）が播磨国 縮見屯倉首 忍海部造細目を頼って 現在の三木市志染に一時 身を隠した記事がある。

また、『播磨国風土記』はこの弘計・億計の 2 皇子の物語の中に「吉備の鉄の狭鋏持ち...」という歌を記している。

この地の豪族忍海部が中国山地の砂鉄を利用した鉄鍛冶の集団と関係していたことや後年この地に天目一 神社が忍海部氏一族の手で創建（1449 年）されたことなど考えるとこの地には鍛冶を仕事とした人々がいたことがうかがえる。

また、押部谷の「押部」の語源はこの「忍海部」に由来するという。

「神戸市西区役所まちづくり推進課」ホームページ等より。

金物街「三木」もそのルーツを遡れば、この忍海部にまで遡れるかもしれないと思っています。

葛城氏が 5 世紀末雄略天皇によって攻められ衰退した後、権勢をほしいままにする蘇我氏は「その出自が葛城である」と言うがこれも、葛城の鉄の権益を無視できなかったからとも受け取れる。

一方、この葛城を本拠とし同じ鴨族から出て主として祭祀を司ってきた鴨氏は引き続き祭祀を司りながら 中央や日本各地に広がって行く。

「忍海」の鉄については まだまだ 知らないこと多く、まだ多くのロマンを秘めている。

吉野・熊野の修験道を開いた「役行者」も葛城の生まれ。まだまだ この金剛・葛城の山麓には多くの和鉄との出会いがあると思う。

司馬遼太郎は『街道を行く「葛城のみち」』で、この山麓の古道を北の忍海 笛吹神社 一言主神社を通過して金剛山麓の高鴨神社へと歩き、この道を「倭王家より古い国今も「国つ神」の残る道」とそのロマンをたぎらしている。



古代の群集墓古墳が点在する和鉄の郷 忍海

2005.3.9.

金剛・葛城山麓 葛城氏の鍛冶工房「忍海」

古代 「忍海」には数々の渡来人が住み鉄鍛冶の技術を伝えた

3. 渡来鉄技術集団の郷 忍海 Walk 2005.3.9.



古代 和鉄の郷「忍海」 忍海 葛城氏の鍛冶工房関連遺跡を訪ねて walk 2005.3.9.

3月9日 晴れ 葛城氏の鍛冶工房「忍海」の郷とその後背にそびえる葛城山の尾根筋に眠るという古代の鉄鍛冶の渡来人の群集墓を訪ねるのが目的でぼかぼか陽気の朝 近鉄忍海駅に降り立つ。

2月に一度来て、すぐそばの葛城市歴史博物館（新庄町歴史民俗資料館）で「忍海」の資料と地図を買って帰ったので、だいたいのイメージは出来ている。後は足任せ 気楽に葛城山麓の山裾の古代 walk である。

頭の中では 寺口忍海古墳群のある葛城山麓公園から群集墓の点在する枝尾根を歩いて 山口の集落へ出て 丘陵地を下って笛吹の集落から脇田の遺跡へ

でも 思い通りに歩けるのか まったく足任せ。忍海駅からまっすぐ葛城山へ向かう道を登って行く。

正面に葛城山の頂上が見える。こちら側に幾つもの枝尾根が張り出し、その下の丘陵地にのどかな田園地帯がひろがり、ぽつぽつと幾つかの森や集落が点在するのどかな田園である。

この枝尾根の幾つかの尾根筋に渡来の鍛冶集団の群集墓があり、下の森が点在する丘陵地が古代忍海の集落である。三角上に均整の取れた尾根の下にある森が笛吹神社のある神山 その下が脇田の集落のあたりか。

此处で5世紀～7世紀にかけて数多くの鉄器が作られ、葛城氏・倭王権をささえた。日本で広く鉄器が使われて行く時代の幕開けである。



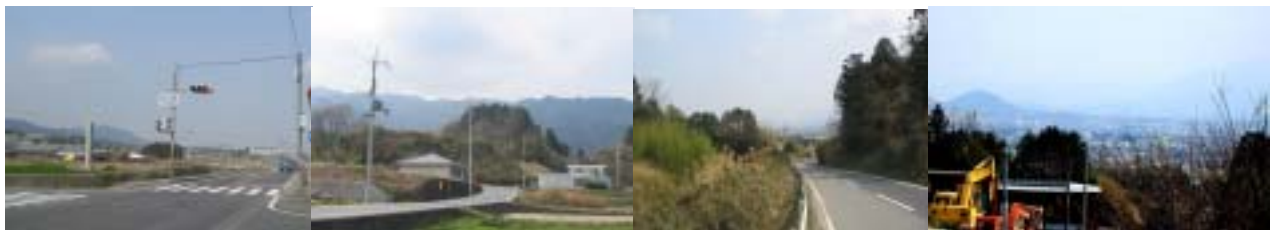
「忍海」の葛城山麓に広がるなだらかな傾斜地

周囲の田園風景を眺めながら田圃の中を道草食いつつ緩やかな勾配の坂道を30分程登ってゆく。

突然南北に葛城山の山裾を貫いて御所から五条・吉野への広い国道にぶち当たる。

司馬遼太郎が「この「葛城のみち」に沿う古い郷を残すためには避けたいが避けられぬ道」と書いている新道。ほんとうにのどかな里を切り裂く交通量の多い新道である。でも、電車が通る下の山裾からは5.60mも登ったか、駅からはかなり離れているので、新興住宅地はこのレベルまで攻め寄せてこない。のどかな風景が維持されている。

この新道を北へ少し歩いて、山田の集落をまた上ってゆく。此处からは登りがさらに急になって、山裾に広がる山襲の上である。所々に梅の花が咲き、振り返ると林越しに大和平野が遠くかすんでいる。



葛城山麓 山田周辺で

正面に葛城山から張り出してきた枝尾根や森が見え、行く手の北の端に二上山。この枝尾根のあたりが、寺口忍海古墳群のある尾根筋。葛城山麓公園の標識が見当たらず、違う枝尾根筋に入ったかと不安になりかけたところで、標識に出会う。標識に従って、北側からこの枝尾根を回り込むと先にもう一つ枝尾根があり、葛城山麓公園の道はこの枝尾根との間へ

回り込む。下って枝尾根の間にはいってゆくと立派な葛城山麓公園の入り口。



葛城山麓公園・寺口忍海古墳群の入り口周辺で 2005.3.9.

3.1. 寺口忍海古墳群（葛城山麓公園） 2005.3.9.



葛城山麓公園に入ると正面に芝生に刈り込まれた斜面があり、その周りは林に覆われた尾根筋が取り囲んでいる。公園の案内図はあるのですが、まったく寺口忍海古墳については触れられていない。

周囲の尾根筋にはみな古墳群があると思われるのですが、果たして入ってゆけるのか不安になる。

すぐ横の公園の管理事務所に入ってこの芝生の丘から山道に入

れば、林の中に古墳群が広がっていること また、地図で想像していたとおり、この丘の向こうは墓苑で桜の時は花見でにぎわう場所であることなど教えてもらう。

芝生の丘に登りると、小さな尾根筋の林の中に山道が続いていて、そこに入ってゆくと、ぼこぼこと小さなこぶがあちこちにある。こぶの上にも木が育っているので、そ



のまま見落としてしまうが、これが古墳群だ。

向こうに一つ 古墳の横穴入り口の石組みが見えるものもある。

すぐ両側が崖の小さな尾根筋の上であるが、崖に作った横穴でなく小さな円墳が並ぶ古墳である。



静かな尾根筋に広がる古代の群集墓 寺口忍海古墳群
2005.3.9.



古墳群の中に据えられた案内板によると寺口忍海古墳群は北・中央・南の3群にわかれ、150基以上の古墳がある。古墳は5世紀末に作られ始め、6世紀を通じて作られつづけ、規模の大きな石室では6世紀後半から7世紀初めにかけて追葬が行われたようだ。

大きさは10メートル前後の小さな円墳が尾根筋に密集して作られ、埋葬施設はほとんどが横穴式石室であるが、一部に九州北部に共通する竪穴系横口式石室が含まれ、多くの石室のが羨道閉塞部で床面が傾斜しているという特徴がある。

(竪穴系横口式特徴の痕跡か。。)

大量に出土した副葬品の中に鉄生産にかかわる鍛冶工具・鉄滓朝鮮半島からもたらされたと推定される馬具や鑄造鉄斧などが含まれ、忍海の鍛冶工房の渡来鍛冶集団との関係していると考えられている。



尾根筋 林の中に建ち並ぶ古墳群

公園の左の尾根を幾つかの円墳を見ながら登る丘の先崖に接して、きれいに整備されたD-30号墳がある。

尾根を利用して築かれた径 12 メートル、高さ 4 メートルの円墳で、6 世紀末から 7 世紀はじめの築造。埋葬施設は、南に開口する横穴式石室で、全長 7 メートル、玄室の長さ 4 メートル、幅 2 メートル、高さ 2.6 メートル。比較的大きな石を使い、奥壁は 3 段、側壁は 2 段でいずれも 1 段目から内に傾斜して組まれ天井石も巨大。盗掘のため遺物は少なく、須恵器、土師器、鉄釘が出た程度。鉄釘から、木棺が埋葬されていたことがわかったと案内板に記載されている。



整備され石室が公開されている D-30 号墳

はやしを抜けると左右の枝尾根が合わさるところがきれいに整地され、芝生の丘と墓苑に整備されている。墓苑に整備された左右の端にこぶが幾つか見えるので、この一体にも数多くの古墳があったと思う。丘の上からは、今登ってきた古墳群の尾根越しはるか向こうに大和平野が見える。



忍海古墳の上部の丘・墓苑から見る大和平野 2005.3.9.

この墓苑の奥からそのまま山口の集落へ南西の枝尾根に沿えば行けるはずであるが道がわからず。

登って来た尾根の下につけられた舗装道路に沿ってもう一つ西の尾根を越える道を探すが判らず。

管理事務所のところで公園整備の人たちに聞くと墓苑の一番上の端から抜けるという。久しぶりにバンの荷台に乗せてもらって墓苑まで引き返し、一番上の端の鍵がかけられた扉の横から塀をすり抜ける。

相当傷んだ舗装道路が左右の枝尾根の間にあった。草ぼうぼうでもうほとんど使われていないのだろうが、図面からするとこの左右の枝尾根にも沢山の群集墓があるはずだけれど深い灌木の中道なし。

10 分ほどで枝尾根の中を抜け、畑が広がる山口集落の上へ出た。

東にはぱっと眼下に大和平野が広がり素晴らしい景色が広がっている。



寺口忍海古墳群を抜け出た山口周辺



寺口忍海古墳群の尾根を抜けた山口集落の上からみた忍海そして大和平野 2005.3.9.

大和三山がぼっかり浮かび、
 王城の地飛鳥も見渡せる。
 倭大王が飛鳥から大和平野越
 しにこの金剛・葛城の山麓を
 見るように 大和の豪族葛城
 氏が大和平野を挟んで王城の
 地飛鳥を眺めている。畦道に
 すわりこんでそんな構図にし
 ばしみとれながら、古代忍海
 にいた渡来鍛冶集団に思いを
 めぐらしていた。



山口集落の上からみた忍海そして大和平野

この寺口忍海古墳群で 150 基を
 超える群集墓 そして すぐ西へ下った笛吹古墳群・山口千塚古墳群も合わせると 100 を超える群集墓がある。この狭い忍海の郷のすぐ上の山端に大きな群集墓が隣接してほぼ 6 世紀百数十年間、3 つも維持され、群集墓合わせると約 300 にもなるのである。

すべてが渡来人 鍛冶技術集団でないにしろ忍海には大きな集落があり、鉄器製造の鍛冶工房を中心に大きな生産活動が行われていたことが判る。

葛城氏というと大和王家との外戚関係がすぐ言われるが、このような朝鮮半島との交流をベースに渡来鍛冶集団による鉄器製造などの高い技術と生産力がその力の背景になっていたのだろう。

古代葛城氏の勢力の源泉 忍海の鍛冶生産工房の大きさに納得しながら山口の集落へくだりました。



注 豎穴系横口式石室

横穴式石室はそれまでの一度だけしか使用しないという豎穴式石室の埋葬形式とは異にして、一度石室に埋葬した後でさらに追葬できる構造をもち、豎穴系横口式石室、横穴式石室、横穴といった後期古墳のもつ大きな特徴である。そこには、埋葬方法の大きな変化がみられ、豎穴系横口式石室は朝鮮半島から伝わってきた横穴式と従来の豎穴式石室との過渡期の日本独特の形式。

竪穴系横口式石室と横穴式石室との違いは、横穴式石室が遺体を安置する部屋（玄室）と玄室に通じる横口部（羨道）の床面が同じ高さで続き、玄室と羨道のどちらにも天井石を載せるのに対して、竪穴系横口式石室は、玄室と横口部とに段差があり、玄室床面が横口部より低くなっていることと、横口部の側壁には天井石を載せないことにある。

日本では北九州に集中的に見られ、その後 各地にも散在する。

この竪穴系横口式石室が横穴式石室にまじっていることから、北九州 朝鮮半島の渡来人の流れを見ることが出来る。

3.2. 山口集落から笛吹神社・脇田集落を通過して忍海の駅へ



山口の集落



山口の集落より寺口忍海古墳のうる尾根筋

幾重にも重なって西に伸びる枝尾根の山際に沿ってくだってくると山口の集落の名が見え、道の別れにお地藏さんが立っている。寺口忍海古墳群のひとつ南の枝尾根筋ですぐ近くで、下ってきた枝尾根の南側斜面のあたりが山口千人塚古墳か・・・。

山口の集落を抜けるとまた畑が広がる中をこんもりした山裾の森を目印に笛吹き集落へくだってゆく。標識を見ながらくだるのであるが、なんせ凹凸の続く丘陵地の上、思い通りにたどり着けず、丘を下りながら結局すこし北へ行き過ぎて笛吹神社のある森の北側から南へ回り込む。



笛吹神社周辺 2005.3.9.



森は平地の上かと思っていましたが、森そのものが小さな丘陵地の先端で高い丘になっていて、神社はこの上で、丘の上に社がみえる。

この丘そのものが、古代の笛吹神社古墳でその後ろに続く尾根筋が古代の群集墓がある笛吹古墳群である。



笛吹神社 【葛木坐火雷（かつらぎにいますほのいかずち）神社】



笛吹集落を少し下って 笛吹神社・笛吹古墳群の森を見上げる

本殿の上に上うっそうとした森の中、立派な神社である。本殿のすぐ裏の急斜面の上に笛吹神社古墳があり、石室の入り口が見える。この古墳の墳丘の上に神社があり、この古墳をご神体としているようだ。



笛吹神社 本 殿(1)



笛吹神社古墳

資料によれば、この古墳は6世紀半ばから中頃の古墳で尾根の先端部を利用した26メートル径の横穴式の円墳でこの後ろの尾根に続く群集墓笛吹古墳群の始まりに関わる中心的豪族の墓と見られる。

また、この後ろに続く尾根には75基ほどの群集墓 笛吹古墳群があるという。笛吹古墳群の大部分は径10メートル前後の横穴式円墳で笛吹神社古墳から西へ尾根筋に約80基に及び広がっているが、ほとんどが工事等で破壊され、所々に石が残っている程度になつたといわれ、ここからは坏、高坏、器台などの須恵器、

鎌、刀子、釘、斧、鋤先、鎌などの鉄製品、轡、辻金具などの馬具が出土したらしい。



笛 吹 神 社 (2)



この神社は一般に「笛吹神社(ふえふきじんじゃ)」と称するが、「笛吹神社」と「葛木坐雷神社」とが合祀されたもので、火雷大神(ほのいかづちおおかみ)と、天香山彦命(あめのかぐやまひこノみこと)

を祀り、現在の本殿は笛吹神社のものといわれる。

「葛木坐雷神社」は927年に完成した「延喜式」にも記載がある古い神社で、古代にこの周辺に住んでいた笛吹連一族の氏神で、もともとは一族の祖神である火雷大神を祀っていたと考えられている。火雷大神の名が示すとおり、笛吹連はもともと古代このすぐ下に集落があった「脇田」の鉄器生産の技術集団と密接な関係があったと考えられ、笛吹神社古墳ならびに笛吹古墳群の群集墓もまた、寺口忍海古墳群・山口千塚古墳群と同様 古代この地周辺に住んでいた 忍海の鍛冶技術集団の一族が作ったものと考えられている。

夕暮れ近く 笛吹神社
の前から東に坂をくだ
る。

はるか遠くに大和平野
が広がり、段々の田圃
地帯のむこうに大きな
集落が見える。



脇田集落越しに大和平野

この集落が脇田集落で
あるが、市街地近く家

並みが続いていて、古代の鍛冶生産工房跡など遺跡としては何も残っていないので、どう歩こうかと思って下っていると広い新道に「脇田」の標識。ここをクロスしてそのまま脇田の集落に入る。直ぐ左田畑の中に脇田神社の新築された社殿が見えるので、この道の両側の田圃一帯が古代の鍛冶生産工房のあった脇田の集落であろう。

きょろきょろと集落の間にある田圃を見ながら下ってゆく。

振り返ると壁のように南北に広がる葛城山を背に その山裾奥に寺口忍海古墳群の山 そして その手前に笛吹の森 そしてその手前に脇田集落の家並みが広がっている。

今見えているこの丘陵地全体が古代5世紀から7世紀にかけて栄えた「忍海」。

5世紀末 葛城氏が衰退した後も、鍛冶工房に従事してきた忍海氏を中心に栄え、7世紀にはこの脇田集落 脇田神社周辺には鍛冶工房と共に東塔 西塔の二つの塔を持った地光寺もあったという。

一日 古代 鉄の郷「忍海」をかつて気ままに歩いて、近鉄忍海駅についた時には日もとっぷり暮れていました。



脇田集落周辺から 葛城山麓を眺める 2005.3.9.

山口千塚古墳群 笛吹古墳群 寺口忍海古墳群のある葛城山の山裾

中央部に忍海集団の神奈備山といわれる笛吹神社のある森「神山」

一番手前が弥生時代から住み継がれ、古墳後期・飛鳥時代 鍛冶工房として倭王権を支えた

金剛・葛城山麓 葛城氏の鍛冶工房「忍海」

古代 「忍海」には数々の渡来人が住み鉄鍛冶の技術を伝えた

4. 古代 鉄の郷「忍海」walk を結んで

「忍海」の言葉に惹かれて 古代 鉄の郷「忍海」を古代鉄 渡来人の足跡を求めての山裾 Walk 本当に満足ゆく walk でした。

倭王権よりも先に倭の国に先住し、多くの渡来人を迎えて独自の技術・文化を栄えさせ、大和王権確立につくした金剛・葛城山麓の郷。 おそらくその中心は「鉄・鍛冶」であったろう。そして、この「鉄・鍛冶」が多くの文化・技術が日本各地に伝播していった。

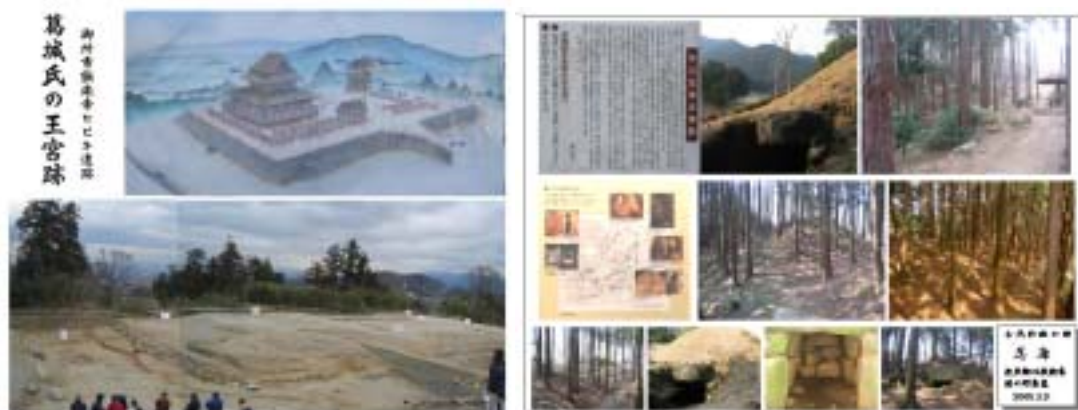
大きく前方に広がる大和平野を眺めながら、彼らもまた倭を動かしているとの実感が合ったのではないか そのおおらかさが、今もタイムスリップしたようにのどかな山麓の風景の中に詰まっている。

「忍海」の鉄については まだまだ 知らないこと多く、この金剛・葛城の山麓には多くの和鉄との出会い・ロマンを秘めているだろう。

また、葛城氏の焼討ちを受けた王宮の出土 悲劇の主人公のようにも写るが、どうもこの葛城・金剛のその後の展開をみているとそうでもないと感じる。何が秘められているのか わからないが。。。。



古代 和鉄を育んだ多くの渡来人が眠る葛城山山麓 忍海



司馬遼太郎は『街道を行く「葛城のみち」』で、この山麓の古道を「倭王家より古い国 今も「国つ神」の残る道」とそのロマンをたぎらしている。本当にそんな感じがピッタリする「忍海」walk でした

2005.3.25. Mutsu Nakanishi